



絵と文  
秋田直躬

私のソックス・アート

私は靴下に惹かれていた。それは私の求める柔らかさ、軽さ、強さを持つている。そのうえ、コクトーの「手袋の裏も亦、手袋」ではないが、靴下の裏返しも亦、充分に靴下であって変質することがない。それに常に身近である。つまり、美しい。肉体労働者を描くことから出発した私の絵画遍歴は、あえて言葉に直すなら、湿地的内向微生物絵画―黒一色の廃虚的絵画―赤と白の特売場垂れ幕的絵画と揺れ動き、現在のソックス・アートまでたどりついた。私の制作に対する「何のためか？」という問には「生きていくから」と答えるより他にいわけだが、もう少し言葉を借りるなら「感じる」と、考えることの産物を、実際に目に見える物に置き代えて、自分で納得したいから」である。そのためには、創るばかりでなく発表して人々に見せる必要がある。私だけが、人間であったり、生きていたりするわけではないからだ。

(高校教諭・美術)